

ふらのみらいらぼ
ふりかえり帖
2020



はじめに

私たちは、年齢や立場を越えて、みんなでアイデアを出し合い自ら実践するワークショップを行っています。合言葉は、「まぜて、まなぶ」です。多世代の仲間が、互いの知恵や知識を貸し借りしながら交流する中で、富良野が「好き」、富良野を「大切にしたい」と、「このまちに住んでよかった」という心を育むことをめざしています。

活動を始めて5年目の今年は、2つのプログラムを展開し、約90名の方が登録しています。新型コロナウイルスの影響により、「まぜて、まなぶ」実践が難しい状況でしたが、オンライン上でのワークショップを取り入れ、「はなれていても、つながる」というコンセプトをプラスして活動しました。

私たちの活動をより多くの方に知っていただくために、2020年度の活動をふり返る冊子を作成しました。たくさんのアイデアを寄せて実践したワークショップの軌跡をぜひご覧ください。

もくじ

はじめに	
川・ひと・アート 水の世界	4
川をたずねる	6
写真と川	8
絵画・造形と川1	10
絵画・造形と川2	12
はなれていても、つながる つながり、ひろがる	14
作品展の軌跡	16
みんなの声	17
はたらく人になって 2020 ICT エンジニア	18
まぜて、まなんで、つながることに寄せて	20
ふらのみらいらば年表	22
おわりに	

*今年度予定していたプログラム「見て作って食べて おいしいを探そう」「サ운ズ&ムービーズ ふらのを伝える」は、新型コロナウイルス感染防止のため実施を見送りました。

川・ひと・アート 水の世界

富良野の地形や川、豊かな恵みを与えてくれる富良野盆地。私たちの身近な「川」や「水」に着目し、川の成り立ちを学んだり、実際に川を訪ねて水に触れ体感したりしました。その時のひらめきや感動を「造形」「写真」

「絵画」などで表現し、5歳児から80歳代まで多世代の参加による65点のアート作品展に仕上がりました。水がめぐり、川沿いを散歩しているかのような空間となりました。

川をたずねる



学ぶ

2020年5月23日開催

富良野市博物館学芸員の泉さんから、富良野の身近な川に関するお話をオンラインで聴きました。私たちの最も身近な「空知川」が、どこからきてどこへ流れていくのかなど、クイズを交えながら教えていただき、基礎的な知識をたくさん得ることができました。後半は、グループでテーマについて交流したり、水に関する絵本の朗読を聴いたりしました。

「オンラインでやるの!？」

参加者の皆さんが集まる最初のイベントで「川・川・どんな川?」と題してお話しました。コロナ禍でオンライン開催となったのを逆手にとって、実際に川を見ることはできない分、頭の中で富良野盆地を縦横にかけめぐっちゃおう!と張り切ってみたのですが・・・。

まずは市街地の地図の上で、主流の空知川や街の中を流れる頭無川などを紹介し、次は盆地全体に目を向けて西(芦別岳や富良野西岳)、東(富良野岳)、北東(十勝岳)へ上っていくいくつもの小河川をたどりました。しかし、オンライン形式のやりとりに慣れていない悲しさ、私の声が皆さんに十分に届いていないのに一方的に進んでしまったり、皆さんの反応をつかみとれていないので話もどこか上滑りになったり・・・。

それでも投げかけた質問に積極的に答えてくれた皆さんのおかげで最終的には南富良野町にある源流のシーソラプチ川、下流の石狩川や石狩湾まで旅をし、途中では「川と

春の初めに、富良野の川がどこに存在し、どんな生き物がいるのか、人々の暮らしにどんな影響を与えているのか、学習することからスタート。身近な川について知識を深めて、いざ、川へGO! 季節の進んだ初夏には、2か所の河川を訪ねました。

訪ねる第1弾～二線川

2020年6月13日開催

なまこ山の下を流れる二線川(空知川支流)で、自然体験を行いました。元気な子どもたちは腰まで水に浸かりながら魚すくいに夢中。その光景をカメラに収めたり、河原を散策するなどして、思い思いの時間を過ごしました。ふだん何気なく見ている川に、こんなにもたくさんの魚が泳いでいたのには驚かされました。



生きもの」「川の名前の由来」「川と人々」といった今後のワークショップの内容や作品づくりのヒントとなるテーマにもふれました。ばたばたしてしまったので、内容はともかく次のワークショップに参加する心の準備になっていればと願いながら話を終えました。

振り返ればこのとき新型コロナウイルス感染症が本格的に流行りだし、緊張感の高まった時期に行われたイベントでした。スタッフの方々が対策を万全に整えてスタートさせ、この状況でも集まってくれた参加者の皆さんのおかげで、秋の作品づくりまでつながる「川・ひと・アート」が滑り出したのだと思います。このイベントの後、私自身はワークショップには参加できませんでしたが、秋に展示を見たりスタッフの方々とお話しして、実りある体験や製作活動、展示につながったことを知ることができました。

参加者、スタッフの皆さんありがとうございました。富良野市博物館学芸員 泉 団

訪ねる第2弾～トナシベツ川

2020年7月18日開催

晴天の下、バス2台に分乗してソーシャルディスタンスを保ちながら、南富良野町金山のトナシベツ川(空知川上流部)へ。ここはワイルドな河原で、熊の生活エリアとのこと。切り立った岩肌を背景に、キラキラと輝く澄んだ川、みんな感動したようでした。魚や水生昆虫を探したり、水の流れや水しぶきを撮影したり、自然観察と川遊びを心ゆくまで楽しみました。また、水色に染めた布を洗うパフォーマンスも行いました。

写真と川

心の中なんてそうそう分かるものでもないのに「心のままに好きに撮っていいよ」というのがじつは一番難しいんじゃないか。「きれいだな」とか「かっこいい」と言葉が浮かんで来たらまだましな方で、魚が目の前をスーッと泳いでいくその姿が目に入り、脳内で言語化される前に、魚がその草の茂みに隠れてしまう前にシャッターを切る。何か心が動いているのだが、何に反応してしまったのか分からない。でも今撮らないと、現実はどうも過ぎ去り、変化していく。

昔、バイクで旅をして撮った写真もそうだった。放浪の旅なので行き先の下調べなんかしない。走りたと思った道を通り、土地のスーパーで食糧を買い、夕暮れにどこかの川原やキャンプ場でテントを張る。新しい風景のなかへどんどん突き進み、その風景がどんな意味を持っているのか、自分の心が何に触発されているのか分からないままシャッターを切る。でもあとから写真を見返すと、たしかにそこに若い日々の熱みみたいなものが残っている。



誰かを深く知れば、生まれた場所や趣味、家庭のこと、仕事のことを知れば、きっとその人の写真をより深く撮ることができる。でも、初対面で何も知らなかったころの、はにかみや初々しさはもう写らないかもしれない。

どちらがいいのだろう。たぶん、どちらも正解であり、カメラを持つ楽しさはそこらへんにあるのではないと思う。

ウグイやイバラトミヨがうじゃうじょいた二線川、広い河原に清冽な流れのトナシベツ川へみんなで行き、それぞれ好き勝手に遊び、びしょ濡れになり、魚をつかんで、木陰で涼んだ。写真班の高校生も大人も自由に撮った。

みんなの作品をずらりと展示したとき、案の定「言語化できない」と思った。美術館で写真展を開催するならチラシに案内文を書かなければならない。それが書けない。

一方で会場に漂っていたのは、みんなで川へ行き時間を共有し、一緒に展示まで持ってきて今ここにいるという、暖かいつながりだったと思う。それは絞りやシャッタースピード、構図なんかより大切なことだね。

いっしょに川で遊び、写真を撮ってくれたみなさん、本当にありがとう。

写真家 石黒 誠

写真制作のあゆみ

6月には、オンライン上で写真ワークショップを開催。講師の石黒さんに富良野の美しい自然の写真や動画を用いながら撮影のいろはを教えてくださいました。後半のグループ・ディスカッションでは、水・川・写真のことを話題に交流できました。

作品展の直前には、二線川やトナシベツ川で撮影した写真等をパネルに貼り付け、会場で作品を展示する作業も行いました。



絵画・造形と川

「裂もしくは雨」

いろいろな事柄が分断され
否応無しのこの状況下
抗うことなく祈りにも似た心持ちでいる
改めて天を仰ぎ地に目を向けると
幸い 時に不確かな自然は変わりなく
暦どおりの時が流れている
私たちの畑に恵の雨が降り
心地よい風に汗を拭う
このつかの間
深層からこの湧水を汲み
心静かにこの時をやり過す

りっぱなイタドリ
大きい割にとっても軽い
良い素材を見つけ
期待がふくらむ



雨色に染色中
鍋でぐつぐつ煮て
白い布を
水色に染めていく



トナシベツ川での
布洗い
染めた布を川ですすぐ
パフォーマンス
水色の布が川の中で泳ぐ



毛糸をつむいで
コツコツと
立体作品を作る
この毛糸は
リサイクルのもの



ペンキ屋さん
大工さん
水置き台を
みんなで製作する
台作りは大人中心
色塗りは子ども中心



エイヤッ！
布を裂く
染めあがった布を雨に
見立てるべく裂いていく
ストレス解消にもなるとか



天井への作品設置
枝を天井に取り付け
雨部分をたらす
高い所の作業を見守る



水飲み場が
『泉』に変身
もともとある給水器を
工夫して高校生が
共同作品を作った



造形制作のあゆみ

4月、イタドリの枝を採取するところから始めました。使用済みの白い布がたくさんあったので、大鍋で水色に染めます。すすぎ洗いはトナシベツ川で行いました。その後、大勢の人に「裂く」作業に参加してもらい、「雨」の部分が出来上がり。イタドリの枝に通し天井からつるして、扇風機で風を送り共同制作「裂もしくは雨」が完成。共同制作では多くの人に参加してもらうことを大切にしています。

</

オンラインに挑戦

今年度はオンライン・ワークショップを2回行いました。新型コロナウイルスの影響で、皆が集まって活動することが難しいため、ビデオ会議アプリ ZOOM（ズーム）を使って双方向に情報交換を行うメディアワークショップに挑戦。家に居ながらにして講演を聴き、参加者同士が交流しました。オンラインという特性上、市内はもちろん、旭川、遠くは東京・京都からも参加いただきました。ほとんどの人が初めての経験だったので手探り状態ではありましたが、「はなれていてもつながる」ことのできるオンラインワークショップの可能性が感じられました。



「ソラプチ水系樹」
山谷 圭司

富良野の「川」の名称の由来を考える

2020.2.24

当企画の立ち上げに際し、富良野の「川」を知る・学ぶきっかけづくりとして、春先に事前学習会を実施。上富良野町在住・彫刻家の山谷圭司氏が、「松浦武四郎の十勝越え」を調べているうちに見つけたという富良野の忘れられた川について「サンナチヨロボックシュナイを知っていますか？」と題した講座を開催しました。合わせて富良野市による出前講座「地域ぐるみの防災対策」も受講し、ウォーミングアップの機会となりました。

東京都からの参加者の声 N.S さん

布を裂くなんて、何十年ぶりの感覚かなあと、懐かしさを感じました。

埼玉県からの参加者の声 M.N さん

今回は、自分の手と力だけを使う事に意義を感じた。裂いているけれど、縫っている気持ちになった。

ラジオ放送を通して「川」をイメージする

川を訪ねるワークショップに参加できなかった方に活動内容を共有してもらうこと、また、富良野にお住まいの皆さんに私たちの取り組みを知ってもらうことを目的に、「二線川」での活動の様子や感想を、参加者が語り合うラジオ番組を制作し、コミュニティ FM77.1MHz ラジオふらのの電波に乗せて放送しました。

神奈川県からの参加者の声 A.S さん

巣ごもりして過ごすことが何かと多いので、ZOOM アプリを利用して、ミーティング出来たこと、楽しかったです。また、初めて ZOOM アプリを使えたことも、楽しかったです。

防災の観点から「川」を考える

2020.9.19

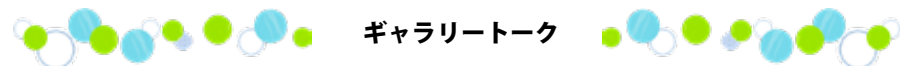
参加者の要望を受けて、同志社女子大学教授 天野太郎氏より「富良野の河川と防災」について講義いただきました。防災マップの見方や富良野市の戦後と現在の町の地形の比較等についてわかりやすく解説していただき、市民レベルで地元の河川について理解を深める機会となりました。



作品展の軌跡

新型コロナウイルス感染防止対策をとりながら、2020年9月7日（月）～9月20日（日）の期間、文化会館2階展示ホールにて作品展を開催しました。

出会いから半年をかけて創り上げたみんなの作品展、コロナ禍でどのくらいの方が来場いただけるか期待と不安の中、約200名のお客様に足を運んでいただくことができました。



ギャラリートーク

春から取り組んできた絵画・写真・造形作品の制作、そして、みんなで創り上げた作品展が無事終了。総まとめとしてギャラリートークを行いました。半年間の活動を振り返り、作品に込めた思い、作品の見どころなど、一人ずつコメント。作者が一堂に会し作品について共有する、とても良い時間となりました。最後は活動終了を祝って、「原始の泉」の湧き水の白湯を味わいました。



■来場者のメッセージ

「水は方円の器に随（したが）う、との言葉がありますが、モチーフは共通の「水」であっても、見えるかたち・伝わる思いは実に様々でした。

それはまさに器に随って自在に形を変える水の姿を眺めているようで、会場を巡ることには、すてきな庭園を散策するような楽しさがありました。

富良野小学校
校長 内藤 晃宏

○皆さんすてきな作品ありがとうございました。水は命の源。大切なテーマだと思いました。コロナもあって大変な中、作品展にまとめられていてすばらしいと思いました。

○みなさんがそれぞれに見えた水の表現が様々で、作品ひとつひとつの世界観を楽しませてもらいました。私も表現してみたいです。

○いつも美しい一面を見せてくれる川。時には水害など自然の怖さもあわせ持っている事も忘れてはいけないと感じました。

○一人ひとり川のとらえ方が違って、とてもおもしろく楽しめました。

みんなの声

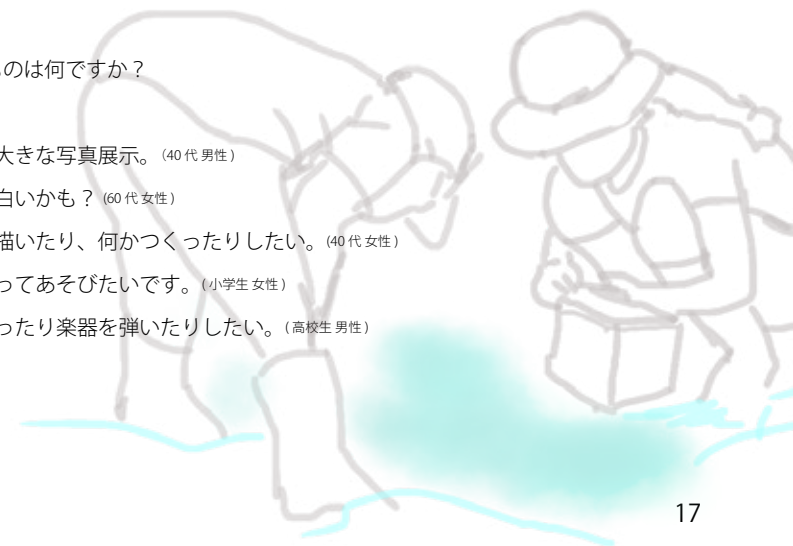
各ワークショップにおいて参加者のみなさんから多くの声をいただきました。一部をご紹介します。

Q. どんなことが楽しかったですか？

- ・離れていながら皆が集まれるのが不思議&とても楽しかった。(50代女性)
- ・多世代の人が参加していろいろな話ができるのが面白いなということ。(高校生 女性)
- ・いつも見ている身近な川ですが、知らないことがたくさんありました。(40代女性)
- ・グループに分かれ、初対面の人と様々な意見交換をしたことが楽しかったです。(20代女性)
- ・外出ができなかった長い時間、子どもたちが自然体験活動に喜びをいっぱい感じていた様子だった。(60代女性)
- ・普段入れないところに入れたこと。(高校生 女性)
- ・小魚の大量がいたこと。(高校生 男性)
- ・さかなをあみでつかまえたこと。家に持ち帰ったにじまを食べたこと。(小学生 男性)
- ・川で絵を描いたことがとても楽しかったです。(小学生 女性)
- ・川の中に入って遊べたこと。(高校生 女性)
- ・みずでつぼう。(小学生 女性)
- ・水遊び。(小学生 男性)
- ・スライムを作ったこと。(高校生 女性)
- ・みんなの力で会場が仕上がっていく経過。(大学生 男性)
- ・みなさんのお話を聞けたことや、原始の泉を飲めたことです。(高校生 男性)

Q. 今後創ってみたいものは何ですか？

- ・ジオラマ。(高校生 女性)
- ・壁一面になるような大きな写真展示。(40代 男性)
- ・立体的な展示品も面白いかも？(60代 女性)
- ・みんなで大きな絵を描いたり、何かつくったりしたい。(40代 女性)
- ・土でどろだんごを作ってあそびたいです。(小学生 女性)
- ・音楽もアートなら歌ったり楽器を弾いたりしたい。(高校生 男性)





はたらく人になって 2020 ICT エンジニア

「ふらのにはどんな会社があって、大人がどんな仕事をしているかを知っていますか？」をコンセプトに ICT エンジニアに着目。主にプログラミングを学びながら、論理的思考とコミュニケーション能力の向上を目指しています。

今年度は新型コロナウイルスの影響で、皆が集まる機会は減りましたが、オンラインを利用して、互いに技術を磨きました。秋には、U-16 旭川プログラミングコンテスト（兼北海道大会）に出場。4 年前から種をまき始めた活動は確実に実を結び、大会では好成績をおさめることができました。

今年度は新型コロナウイルスの影響で、皆が集まる機会は減りましたが、オンラインを利用して、互いに技術を磨きました。秋には、U-16 旭川プログラミングコンテスト(兼北海道大会)に出場。4年前から種をまき始めた活動は確実に実を結び、大会では好成績をおさめることができました。

挑戦者のみなさんの生き生きとした様子。(30代・女性) / それぞれの個性あふれるプログラムがあり、自分の思うように動作した人やそうじゃなかった人どうしがアドバイスをすることで、さらに高めていくところがとても良いと思った。(高3・男性) / 西原先生のまいてくれた種が育ち、なんとか途切れず、次の世代が育ってうれしい。ただ直に先生の指導を受けた世代の高校生たちも富良野を離れていき、指導する力が減っていくので、なんとか今後に繋げたいなと思います。(40代・女性) / 来年また頑張ろうとする姿(高3・女性) / 出来ないこと続きでも、ずっと「楽しい!」といいながら取り組む息子の姿。(30代・女性) / 無駄の無い回路で凄くなって思った(高1・男性) / オンラインでも楽しい(50代・女性) / まさかの結末に (中3・男性) / 次は大会を見学していろいろなことが分かったのもにプログラムを組んでみたいです。(小6・男性)

継続したい！次世代につながるように、参加者が増えたらいいと思います。(30代・女性) / プログラミングや電子工作を続けられるような環境づくりかな。(40代・男性) / 今年もとても面白いコンテストになりました。未来ラボに集まって観戦出来たこと、わざわざ表彰式を開催してくださったこと。コロナ禍の中でも本当に楽しくプログラミングをすることができました。本当にありがとうございました。(中1・男性) / この環境に感謝します。これからも続けてもらいたいです。(30代・女性) / 続けてほしい (50代・女性) / またやりたいです(中3・男性) / また次もプログラムに関するワークショップがあると嬉しいです。(小6・男性)

自分がいた初めの2年は緑峰高校工業クラブの生徒の協力ももらい、月一回程度の講習会と直前の自習会を展開しました。教わる時間でない自習会は無駄と考えるかも知れませんが、手を動かす時間として区切られる学習できる場の提供を行うことが極めて重要でした。この中で、教わる側から教える側に移る人が育ち、やり方や考え方を共有する文化ができ、受け取るばかり



実はこの活動はこれからが勝負です。これから第一世代が進学等で普段の活動に参加できなくなることを見据えてやらなければなりません。上手に下の世代につなげられるか、帰省の機会で協力してもらえるような取り組みができるか、遠隔からの支援を受け入れるかどうかなど、はじめときの苦労とは別の苦労があります。しかし結局のところ、派手なことに手を出さず、地道にやるのが続ける秘訣です。これからも今まで同様に情報や電子技術を学びたいと考えている人が、富良野で楽しい今日を過ごせるよう、地道な活動が続くよう応援しています。

サイボウズ株式会社 西原 翔太



まぜて、まなんで、 つながることに寄せて

地方の時代と言われてずいぶんたちますが、自分の住んでいる「まち」が、ふれあいのある「まち」になって、愛着を持って暮らしていくためには、どんなことが必要なのでしょう。 「ふらのみらいらぼ」の一連の活動に、その答えの一端が見えます。

今年度のテーマは、「川・ひと・アート～水の世界～」でしたが、多様な世代と一緒に学び合う（まぜて、まなぶ）ことは、それぞれの世代にとっても新たな発見があり、よい刺激となります。 また、多世代と一緒に学ぶことで、地域の歴史・文化、子育て・地域活動など、高齢者がこれまで培ってきた知識・経験を若い世代に伝えることができます。併せて、協働していく（まぜて、まなぶ）ことを通じ、人と人、人と地域、人と社会の関係が広がり、つながることで、ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）が形成されます。

学びを通して人と人がつながり、多くのコミュニケーションが生まれる。それは、人口減少、高齢化、核家族化といった社

会的課題の解決につながるものであり、地域コミュニティの活性化への手がかりともなります。

学ぶことに興味や関心を持ち、自分がそれまで学んできた知識を、関連付け、つなげていくことで、学びは深化していきます。 また、オンライン上での「離れていても、つながる」ことも含めて、一人一人の個人的な学びから、共通の問題意識や興味を持った人々が集い、交ざって学び合い、深め合う学習へと発展していけば、学びは一層深化します。

このように、個々人が学んできた学習活動の記録や、一緒に学び活動した人同士が交流を深め情報を共有する場（＝ふらのみらいらぼ）の存在が、学びの深化からステップアップや実践につながり、ひいては「潤いあるまちづくり」のきっかけになるものと考えられます。

すぞいんです。この活動は。

富良野市教育委員 宮本 鎮栄

ふらのみらいらば年表

年	月	プログラム名	内 容
2016	4	オリエンテーション	多世代が対等な立場で学び合う4つのワークショップを紹介。
		まちろつくろう ふらのゆめらんたん	空に掲げてみたい「らんたん」イメージの意見交換。つくる・れんらく・じっこう部隊の立ち上げ。
	5	空から鳥になって ふらのを知ろう	A4サイズのジオラマ・ワークショップ。自分のdaisuki ふらのを探す。
		見て、作って、食べて 美味しいを探そう	地産の粉から餃子の皮づくり、3種の具を詰め食べ比べ。「みんなで作って、一緒に食べる」を大切に。
		はたらく人になって ウェディングプランナー	はたらく人、しごとを知るきっかけづくり。入籍直後のご夫妻に向けてのウェディング・プランニング。
	6	空から鳥になって ふらのを知ろう	博物館のプロ製作富良野全景ジオラマで地域の成り立ちを見学。空から鳥になったワークショップ。
		"	空飛ぶ鳥のモビールや雪をかたどって、ふらのdaisuki ジオラマの展示を目ざすワークショップ。
	9	東京大学体験活動プログラム	東京大学大学院教育学研究科体験活動プログラム2016「文化ワークショップを基本とした過疎・高齢地区のまちづくり体験プログラム」参加の4名と文字通りまぜてまなぶ。
		はたらく人になって ウェディングプランナー	「はたらく人」として、6つの係「監督」「演出」「道具」「衣装」「宣伝」「お楽しみ」に分かれて実際に動き出す。
	10	見て、作って、食べて 美味しいを探そう	5つの種類の芋拾いを体験。茹でて、揚げて、食べ比べ。大地の豊かな恵みをほおばった。
		まちろつくろう ふらのゆめらんたん	コンセプト～家族をこえた人たちが「ゆめ」をもちる～を共有。富良野緑峰高校と富良野西中学校の生徒会が初めてまざったワークショップ。
2017	11	富良野市民総合文化祭搬入	私達の活動を広く市民に周知することができる文化祭での展示。
		ギャザリング・パーティー	オリエンテーションから半年、4つのプログラムの状況を共有し合い、プログラムを超えて協力し合うきっかけづくりとなった。
	12	まちろつくろう ふらのゆめらんたん	富良野緑峰高校生生徒会と富良野西中生生徒会を中心とした「ふらのゆめらんたん実行委員会」発足。つくる・れんらく・じっこう各部隊の進捗を確認。
		見て、作って、食べて 美味しいを探そう	富良野のソウルフード「ふらのオムカレー」を推進するふらのカレンジャー娘とまぜて、まなんだ。明るく優しい指導を受け、緑峰高校でも「美味しい」を見つけた。
	1	はたらく人になって ウェディングプランナー	道具・衣装・宣伝の各班は周回に声掛け、巻き込みながらウェディング当日のイメージを具体化。
		"	衣装係のしごと「ヘア・メイク」を、プロのデモンストレーションに学ぶ。ウェディング当日はドレスの着付けからメイクの仕上げまで衣装係が担当する。
	1	まちろつくろう ふらのゆめらんたん	「らんたんづくり」「チラシづくり」「本番の流れ」などの報告。気球揚げ等のプロを講師に、らんたんの上がる原理を確認。
		"	「ふらのゆめらんたん」本番。あらためて風速管理の専門家の計測により、風速1mを確認。真冬の夕空に150基の夢をのせたらんたんがゆっくり揚がった。
	2	はたらく人になって ウェディングプランナー	ウェディング当日の「役割分担」という新たな準備。それぞれの準備が整い始め、内容の濃いミーティングが続く。
		"	2回にわたる緊張感いっぱいのリハーサル。
2018	2	"	多くの人が参加したウェディング本番。はたらく人、しごとを知るきっかけづくりとなり目的を達成した。
		"	富良野緑峰高校のカレンジャー娘、ふるさとワーキングホリデーの大学生など多数の参加。「美味しい」をどのように探そうかのミーティングを重ね、それぞれ役割をもって本番を迎え、より深い活動となった。
	3	見て、作って、食べて 美味しいを探そう	見て、作って、食べてを繰り返す。地産の粉から餃子の皮づくり。多彩な持寄り食材がタネとなり、美味しいものが見つけた。
		はたらく人になって ICT エンジニア ①	今年度の「はたらく人になって」プログラムは「ICT エンジニア」。初歩的なプログラミングに触れていく。まずは旭川で開催される「U-16 プログラミングコンテスト」参加に向け、活動開始。そもそもプログラミングってなに？から始まり簡単なコード書きに挑戦。
	4	"	②
		はたらく人になって ICT エンジニア	「U-16 プログラミングコンテスト」に向けさらに進んだコード書きに挑戦。先生に教わるだけでなく、参加者同士で教え合うシーンが増える。
	5	空から鳥になって ふらのを知ろう	高齢者大学（ことぶき大学）での実践。A4サイズのジオラマづくりを通し先輩方の富良野への思いを知る。古布や紙の切れ端を使って自由に伸びやかに。進め方は十人十色。
		"	空から鳥になって…ジオラマのイメージづくり。
	6	"	高齢者大学（ことぶき大学）での実践2回目。ひとりひとりの地域の思いが、見事A4サイズ・ジオラマに表現。富良野市図書館2階での作品展での合同展示。地域の奥行きを見ることができた。
		サウンズ&ムービーズ ふらのを伝える ①	コミュニティFMと防災について。スタジオ見学と放送のしくみ、番組づくりに必要な「コト」と「モノ」を知り、みんなが聴きたい番組を考える。
2019	6	"	②
		"	グループに分かれて番組制作を進める。ラジオネームとテーマ決め、いざ収録練習。
	7	空から鳥になって ふらのを知ろう	A4サイズのジオラマから、ふらの巨大ジオラマへと進化する。まずは縮尺の割合を出し、建物の展開図をつくることから。子どもとシニアと高校生がまざる。
		サウンズ&ムービーズ ふらのを伝える	番組テーマの決定、キュー・シート（進行表）をつくる、収録練習をする。子どもと高校生との協力的体制に、頼もしさの可能性を感じる。
	8	空から鳥になって ふらのを知ろう	ジオラマづくりに欠かせない国土地理院の地図、google map など、使用にはルールがあることに注意。知識を共有しながら制作を進める。
		はたらく人になって ICT エンジニア ①	「U-16 プログラミングコンテスト」に向け、勝つための戦略をたて、それをコードにしてプログラミングを完成させ、実際に参加者同士で対戦。みな積極的に意見交換し、自分の作成したプログラムをより完成度の高いものへ考えていった。
	8	"	②
		"	
	9	空から鳥になって ふらのを知ろう	
		サウンズ&ムービーズ ふらのを伝える	

年	月	プログラム名	内 容
2017	9	サウンズ&ムービーズ ふらのを伝える	小学2年生から80代の参加者と一緒に教育バスで西布礼別「富良野塾跡地」へ。「ふらのを伝える」という目的で、卒業生にインタビューする番組を現地で収録。
		見て、作って、食べて 美味しいを探そう	つつむを繰り返してみる。地産の粉で家庭料理「春巻き」づくり。ここにも新たな「美味しい」があった。
	はたらく人になって ICT エンジニア	第7回U-16 プログラミングコンテスト旭川大会当日。個人の集中力や仲間と一体感を積み重ねて、本番に臨んだ。	
	11	はたらく人になって ICT エンジニア ①	IoTを知り、マイコンに触れて科学への興味とモノづくりへの関心を高める目的。マイコン「アルディノ」でモーターを動かして音の出る楽器を作る。さらにPCにつないでLEDを光らせた。二日目は作った楽器で合奏。ものづくりを体験。
		〃 ②	
	12	見て、作って、食べて 美味しいを探そう	地産の粉でオリジナル・ピザづくり。ふらの野菜は素材の時点で、すでに格別の美味しさ。
		はたらく人になって ICT エンジニア ①	プログラミング言語C#を学ぶ。数学的思考の必要性、考えを組み立てる力を育む。練習問題で個人差。大人や高校生からのヒントで前へ進む。
	1	見て、作って、食べて 美味しいを探そう	美味しいものをくり返してつくる。野菜ソムリエ自作イラストで「玉ねぎ」について理解を深め、おやつタイムにピザづくりに挑戦。
はたらく人になって ICT エンジニア ②		プログラミング言語C#を学ぶ。数学的思考の必要性、考えを組み立てる力を育む。練習問題で個人差。大人や高校生からのヒントで前へ進む。	
2018	4	はたらく人になって ICT エンジニア ①	2018年度の「はたらく人になって」のプログラムは前年度同様「ICT エンジニア」。あらためてふらのにはどんな会社があって、大人がどんな仕事をしているか知っているか？を大人も子どもも一緒にまなぶ。ICT エンジニアを目指して、身近な存在の遮断器や押ボタン信号機システム製作の電子工作にチャレンジ。緑峰高校生が講師役を担った。
		〃 ②	
		麻・まち・アート 白い服プロジェクト	「麻町」の歴史を紐解きながら、白い麻布で服を手縫いする。縫い上げた服をまとい写真撮影やそれを作品展に仕上げるワークショップ。
	5	麻・まち・アート 白い服プロジェクト	写真班は、撮影する際の「心」と「技」が結び付いた写真表現にチャレンジ。裁縫班は布の裁断がスタート。7月の撮影。9月の作品展に向けて熱が入る。
	6	はたらく人になって ICT エンジニア ①	2018年度の「はたらく人になって」のプログラムは前年度同様「ICT エンジニア」。あらためてふらのにはどんな会社があって、大人がどんな仕事をしているか知っているか？を大人も子どもも一緒にまなぶ。ICT エンジニアを目指して、身近な存在の遮断器や押ボタン信号機システム製作の電子工作にチャレンジ。緑峰高校生が講師役を担った。
		〃 ②	
		特別ワークショップ：大学院生ワークショップ	テーマ：びせいぶつ〜マイクロな世界へご招待〜 東京大学 中山宗一郎講師
		〃	テーマ：味と匂いから見る豊かな世界 東京大学 藤林駿佑講師
	7	サウンズ&ムービーズ ふらのを伝える	声楽家とピアニストを講師に迎え、市内歌声サークルと少年少女合唱団メンバーと一緒に童謡や唱歌を歌う。
		麻・まち・アート 白い服プロジェクト	自作の白い麻の服をまとい麻町を経由して鳥沼公園へ。写真班による撮影を行い、9月の作品展に向けて準備が進む。
2019	8	はたらく人になって ICT エンジニア	石狩市にある「さくらインターネット（株）データセンター」見学ツアー。厳重なセキュリティチェックで緊張感を持っての見学。プログラミング教育必修化を踏まえ視野が広がった。
		見て、作って、食べて 美味しいを探そう	来訪中の大学生たちと、事前に献立を作らない「お膳立てのない料理」を実施。幼稚園児からシニアまで楽しんだ。
	10	サウンズ&ムービーズ ふらのを伝える	（株）ラジオふらのの協力のもと、収録初体験という大学生、経験のある小学生・高校生による「まぜて、まなぶ」ラジオ番組制作ワークショップ。
	11	はたらく人になって ICT エンジニア	2回目の「U-16 プログラミングコンテスト」参戦。参加者は小・中・高校生合わせて9名。緑峰高校生のリードでここまで合計12回のワーキングを重ね、本番に臨む。
	12	見て、作って、食べて 美味しいを探そう	中国湖南省出身の講師による中華料理に挑戦。食材の切り方、炒めるポイントなど、本場の技を学び中国が身近になった。
		4 森・ひと・アート 緑の緑プロジェクト	森に分け入り、ひらめきや感動を作品に仕上げる。富良野の森の成りたちや歴史について学習した後、写真・造形・絵画の3班に分かれ活動をスタート。
	5	〃	まだ寒い鳥沼公園の森に分け入った。作品の素材探し。森にも、人にも少しずつ馴染んで行く。
		〃	前回より緑が濃くなった鳥沼公園で季節の移りを変え。富良野高校生美術授業とのコラボ実現には、かつてないほどの新鮮な感動があった。
	6	〃	少しだけ深く、富良野の森に分け入る。季節が進み葉が生茂る森の中で、怖さと高揚感を肌で感じながら、作品のモチーフを探し続ける。
		はたらく人になって ICT エンジニア	2019年度の「はたらく人になって」のプログラムは前年度同様「ICT エンジニア」。今回のテーマは「停留所に近づくバスの再現」。Arduinoというマイコンを使用し、プログラミングして電子工作上で再現した。高校生が講師役の担い手となり、小中学生をリードする活動となった。
2019	特別ワークショップ：哲学ワークショップ	「多世代でまざる」を哲学。テーマが四方八方に散らばって、時には笑い、沈黙し、粘って話し合う。考えるレッスンで他者の発言に真剣に向き合った90分。	
		見て、作って、食べて 美味しいを探そう	畑のかぼちゃにフォーカス。育て方、品種、採り頃の見分け方の指導を受け収穫体験。大地の恵みと農家さんに感謝。
	8	森・ひと・アート 緑の緑プロジェクト	森の香りのアロマ・ハンドトリートメントに挑戦。互いに向き合って手に触れるトリートメントは、会話を弾ませる。
		見て、作って、食べて 美味しいを探そう	かぼちゃを食べる！にフォーカス。ベテラン主婦の見守る中で、子どもたちが真剣に調理に取り組む。絶妙なチームプレーでスモーズに作業が進んだ。
	9	森・ひと・アート 緑の緑プロジェクト	作品展の総仕上げワークショップ。半日に渡る活動を振り返った。役割分担や入念な準備により、作品会場をスモーズに設置できた。
		10 見て、作って、食べて 美味しいを探そう	重たく立派に成長したかぼちゃとじっくり向き合うワークショップを開催。水彩画や版画でのかぼちゃアートを行った。
	11	はたらく人になって ICT エンジニア	小中学生メンバーが「U-16 プログラミングコンテスト」に出場。小学6年生の1名が予選を突破し、決勝リーグベスト16に進むことができた。
		サウンズ&ムービーズ ふらのを伝える	ラジオふらのの設立に携わった方を講師に迎え、ラジオってなに？どんな時に役立つの？「マイクの前に立つときの構え」等について講義いただき、番組作りのポイントを学んだ。続いて実際にスタジオで収録練習を行い、今後放送する番組制作に向けて準備を行った。

おわりに

年齢や立場を越えた仲間が集い同じ時間を共有する私たちのワークショップは、いつも新鮮な驚きや発見があります。今年はコロナ禍ということで、感染症対策をしながらの制限のある活動ではありましたが、新たなチャレンジもあり、無事に作品展も行うことができました。

このような体験を積み重ねることで生まれる小さなつながりが、富良野の「まちづくり」への良いきっかけになることを願っています。5年という時の流れと共にワークショップの形やメンバー構成は変化していますが、ゆるやかなつながりを大切に、これからも交流の場を生み出していきたいと思います。

みなさんも「まぜて、まなぶ」ワークショップを一緒に作ってみませんか？
たくさんのご参加をお待ちしております。

年	月	プログラム名	内 容
2019	12	見て、作って、食べて 美味しいを探そう	かぼちゃの種に注目。かぼちゃから種を取り出し、ワタと種を分けオープンで焼いて、種の殻をむき、食べられるように試行錯誤しながらチャレンジした。
	2	はたらく人になって ICT エンジニア	企画・デザイナーになったつもりで、ふらのみらいらぼ参加募集のチラシをみんなで作成した。
2020	5	川・ひと・アート 水の世界	ビデオ会議アプリ「ZOOM」(ズーム)を使って双方向に情報交換を行うメディア・ワークショップに挑戦。オンライン上で、市内をはじめ、旭川、遠くは東京・京都からも参加いただき、30名程のメンバーがビデオ会議アプリを介してつながった。
	6	〃	富良野市内を流れる「二線川」での自然観察。お天気に恵まれキラキラと澄んだ川で、子どもたちは腰まで川に浸かりながら魚をすくって川遊びを楽しんだ。
	〃	〃	富良野市在住の写真家の方を講師に迎え、ビデオ会議アプリ ZOOM を使った写真オンライン・ワークショップを開催。富良野の美しい自然の写真や動画をいながら撮影のいろはを教えていただいた。
	7	〃	ソーシャル・ディスタンスをとりながら写生会を開催。空知川右岸から景色を眺め、水彩絵の具や色鉛筆で絵を描いた。
	〃	〃	「川を訪ねる第二弾」としてトナシベツ川(南富良野町金山)で開催。岩肌が切り立つワイルドな河原で、小学一年生から80代の方まで、自然観察&川遊びを心ゆくまで楽しんだ。
	8	はたらく人になって ICT エンジニア	新型コロナウイルス感染防止の為オンラインにて、富良野緑峰高校の電気システム科生が小学生向きに作成したレジュメを基に、高校生が参加者に教える形で開催。今回は、「Scratch」(スクラッチ)を使い「ねこからにげろ」のゲーム作成に挑戦した。
	9	川・ひと・アート 水の世界	作品展に向けて、搬入ワークショップを開催。「川」や「水」から得たひらめきや感動を表現した写真・絵画・造形作品が大集合。みんなで一つ一つ丁寧に思いを込めた作品の展示作業を行った。
2020	〃	〃	プログラムの総まとめとしてキャラリートークを開催。半年間の活動を振り返り、作品に込めた思い、作品の見どころなど、一人ずつコメント。作者が一堂に会し作品について共有する、とても良い時間となった。
	11	はたらく人になって ICT エンジニア	オンライン上で開催された「U-16 旭川プログラミングコンテスト(兼北海道大会)」に出場した。小年生5年生から高校1年生まで選手6名が参加し、暮しステーションにてYoutube 観戦会も同時開催。



ふらのみらいらぼ ふりかえり帖 2020

発行日 : 2020 年 (令和 2 年) 12 月
 編・刊 : 一般社団法人 富良野デザイン会議 暮らしステーション
 ふらのみらいらぼ
 〒 076-0011 富良野市末広町 18 番 5 号
 電話・FAX : 0167-23-4000
 電子メール : kurashi@agate.plala.or.jp
 編集者 : 山岸 千恵・佐藤 直美・浦田 芳穂
 イラスト : yachiko

本書の発行は、富良野市「ふらのまちづくり未来ラボ推進事業」の成果品の一部です。